DOI: 10.6579/ NJEAC.2014.1.5

與謝野晶子的和平思想

太田登 *

21 世紀，誠如美國九一一恐怖攻擊事件、阿富汗戰爭、伊拉克戰爭所象徵的，「戰爭與和平」、「民族問題」、「恐怖分子之應對」這些極為難解又錯綜複雜的國際性人類的課題，揭開了此新世紀之序幕。針對此難解又錯綜複雜的課題，欲以與謝野晶子在 1904 年日俄戰爭之背景下，創作的一首詩〈君死にたまふことなかれ〉（你不要死去）為文本，進行檢討。

這首詩於明治 37 年（1904 年）雜誌《明星》9 月號發表以來，評論的角度多傾向於探討此詩是反戰詩、非戰詩還是天皇批判。然本論將以此詩的主題為「對世界和平之希求」之論點，並觸及和同時代女性表現者的戰爭詩的關係、與俄國文豪托爾斯泰思想上的關聯等層面，重新檢視此作品。

進而，與謝野晶子兩次國外的旅行，即以法國為中心的歐洲之旅與以當時滿洲（今中國東北）為主的亞洲之旅，對於日後她的和平思想之影響為何，也一併考察。

關鍵字：〈君死にたまふことなかれ〉（你不要死去）、與托爾斯泰的關聯、渡歐體驗、世界和平思想、滿洲紀行

* 國立臺灣大學日本語文學系教授

与謝野晶子の平和思想について

太　田　　登*

21 世紀という新しい世紀は、アメリカでの同時多発テロ事件、アフガニスタン紛争、イラク戦争に象徴されるように、〈戦争と平和〉〈民族問題〉〈テロの応酬〉というきわめて難解で錯綜した国際的人類的課題によってはじまった。その難解で錯綜した課題について、1904 年の日露戦争を背景にした与謝野晶子の「君死にたまふことなかれ」をテキストにしながら検討したい。

この詩は、明治 37 年 9 月号の「明星」に発表された当初から、反戦詩、非戦詩あるいは天皇制批判という視点から論及される傾向にあった。しかしこの詩の主題が「世界平和への希求」にあるという論点から、同時代の女性表現者の戦争詩との関連やロシアの文豪トルストイとの思想的連帯などを視野に入れながら読みなおしてみたい。

さらにフランスを中心としたヨーロッパへの旅と旧満州（中国の東北部）を中心としたアジアへの旅が、その後の晶子の平和思想にどのような変化をもたらしたかを考える。

キーワード：君死にたまふことなかれ、トルストイとの連帯、渡欧体験、
世界平和思想、旧満州紀行

* 台湾大学日本語文学系教授

一、はじめに

21 世紀という新しい世紀は、2001 年 9 月 11 日のアメリカでの同時多発テロ事件、それにひきつづくアフガニスタン紛争、イラク戦争（2003 年 3 月～2010 年 8 月）にみられるように、〈戦争と平和〉〈民族問題〉〈テロの応酬〉という実に難解で錯綜した国際的人類的民族的な課題の提起によってはじまった。いままさに 21 世紀の 10 年目を迎えようとする現代にあって、この混沌としたいわば出口の見えない閉塞的な国際社会にもっともきびしく問いかけられていることは、21 世紀における世界の一体化への具体的な道筋ではないであろうか。端的にいえば、政治的論理でいう戦略的互恵関係ではなく、人間的論理としてのあるべきインターナショナリズムの確立が求められているのではないか。その意味において、いまから 106 年まえの日露戦争（1904 年 2 月～1905 年 9 月）を背景とした与謝野晶子（1878～1942）の「君死にたまふことなかれ」は、21 世紀に生きる私たちに具体的な道筋を提言していると考えられる。

二、「君死にたまふことなかれ」の主題

明治 37 年 9 月号の「明星」に発表された「君死にたまふことなかれ」は、「旅順口包囲軍の中に在る弟を歎きて」という詞書きが示すように、戦場の最前線である旅順包囲軍にいる実弟宗七の安否を気遣う姉の心情を吐露したものである。この詩は、一連七五調八行で全五連四十行詩として、いわば起承転結の物語的に構成されている。その主題は、結論からいえば、すべての連に繰り返される「君死にたまふことなかれ」の言葉に凝縮された「平和への祈り」と「生命（いのち）の尊さ」を女性表現者として真率な声でうたったところにある。その物語的展開を各連ごとにたどっておこう。

いわゆる「起承転結」の「起」にあたる第一連では、

　　ああ、弟よ、君を泣く、
　　君死にたまふことなかれ、

と「末に生まれし」戦地の弟に呼びかける姉の心情がきわめて直裁大胆にうたわれる。

人を殺せとをしへしや、
人を殺して死ねよとて
二十四までをそだてしや。

たとえ人を殺し合う戦場にあっても人間の生命にたいする尊厳を忘れてはならないという親の思いは真実の声である。

「承」にあたる第二連では、

旅順の城はほろぶとも、
ほろびずとても何事ぞ、

乃木希典大将が率いる第三軍による旅順包囲戦の第一回総攻撃が8月19日にはじまり、多数の死傷者が続出したことを知っていたであろう晶子は、旅順の要塞と故郷の「堺の街」とを対比的にとらえ、「旅順の城」よりも大切な人間の生命と家族の絆があることをうたう。

第三連では、

かたみに人の血を流し、
獣の道に死ねよとは、

戦争によって人間と人間が殺し合わなければならないことの愚かさや悲惨さをうたう。

「転」にあたる第四連では、

わが子を召され、家を守り、
安しと聞ける大御代も
母のしら髪はまさりぬる。

「母のしら髪」に象徴された「銃後の守り」につく女性のけなげさがクローズアップされる。そして「結」にあたる第五連は、

十月も添はでわかれたる
少女ごころを思ひみよ、

新しい生命の誕生を暗示しながら、そのためにこそ「君死にたまふことなかれ」と叫ばねばならないという肉親の情愛によって物語は閉じられる。

このように弟を思う姉の心情が第五連の「少女ごころ」に集約される「君死にたまふことなかれ」の構図は、第一連「末に生まれし君」、第二連「親の名を継ぐ君」、第四連「すぎにし秋を父ぎみに」「おくれたまへる母ぎみ」、そして第五連「あえかにわかき新妻」などが登場する〈家族〉の絆を主題

とした家族劇でもある。つまり、この詩の基盤を構成している〈家族愛〉という論点からいえば、〈家族〉の絆や〈家族愛〉よりも国益を最優先する〈戦争〉を容認することはできないという晶子の真意をどう読みとるかが、この詩の生命線にかかわる。あえて性急にいうならば、第三連にまったく家族の肖像や風景は描写されないのは、ひとえに「すめらみこと」の「大みこころ」にすがるしかないという赤子の情を訴えるためであった。したがって第三連の

　　すめらみことは、戦ひに
　　おほみづからは出でまさね

という表現がただちに天皇制批判であり、不敬罪にあたるという理解はあたらない。むしろ、「大みこころの深ければもとよりいかで思されむ」とうたうように、家父長制度にもとづく「国家」の親ともいうべき「天皇」は、みずから戦場におでましにならないが、よもや〈家族〉の絆や〈家族愛〉を軽んじられるはずなどないであろう、という願望がこめられていると考えるべきである。最近の研究では今野寿美が『２４のキーワードで読む与謝野晶子』（平成 17 年 4 月、本阿弥書店）で、諸家の論旨をふまえつつ第三連に晶子の〈尊皇の意識〉が反映しているという有益な読みかたを提示している。

しかし当時の論壇では〈家族愛〉はおろか〈尊皇の意識〉とは正反対の非国民の詩として厳しく糾弾された。その急先鋒であった大町桂月の「人生と戦闘」（「太陽」明治 37 年 10 月）は、「宣戦詔勅」にたいする危険きわまりない思想であり、乱臣、逆徒の詩であると痛烈に攻撃した。しかし、こうした厳しい指弾にもかかわらず、すぐさま晶子は「ひらきぶみ」（「明星」明治 37 年 11 月）で反論する。「筆とりてひとかどのこと論ずる仲間」として「当世の戦争唱歌、忠君愛国などの流行こそ危険」であり、「私はまことのなさけ、まことの道理、まことの心をまことの声に出だし候とより外に、歌のよみかた心得ず候」というように、人間としてのまことの情理を第一義とする自己の信念をまげることはなかった。のみならずその晶子の不屈の信念は、いわば女性表現者が女性表現者の意識を変える力を持っていた。

大塚楠緒子は、開戦間もない時期の「進撃の歌」（「太陽」明治 37 年 6

月）で

進めや進め一斉に
何に恐るる事がある
日本男子ぞ嗚呼我は

と「宣戦詔勅」に合致する戦意高揚の新体詩をつくっていた。しかし、「お百度詣」（「太陽」明治 38 年 1 月）では、

ひとあし踏みて夫思ひ
ふたあし国を思へども
三足ふたたび夫おもふ
女心に咎ありや

というように戦地の夫の無事を祈る女性の視点を強調している。晶子の「君死にたまふことなかれ」は、日露戦争という同時代を生きる女性詩人の意識に強烈な衝撃をもたらしたといえる。

三、トルストイとの連帯

周知のように、敵国ロシアの文豪トルストイは、この日露戦争にたいして「爾ら悔あらためよ」（日露戦争論）という英語による論文を「ロンドンタイムズ」（1904 年 6 月 27 日）に発表していた。その日本語訳は幸徳秋水らの「平民新聞」（明治 37 年 8 月 7 日）や「東京朝日新聞」（明治 37 年 9 月）に掲載された。晶子じしん「ひらきぶみ」のなかで「『平民新聞』とやらの人たちの御論議などひと言ききて身ぶるひ致し候」と述べているように、社会主義者の主張する反戦主義とは一線を画そうとしていたことがわかる。と同時に特定のイデオロギーにかかわらず、広くジャーナリズムの動向に関心を寄せていたことも察知される。主戦論者であった主筆の池辺三山の陣頭指揮によって、戦況の報道に総力を集中していた「東京朝日新聞」に掲載された杉村楚人冠の日本語訳になるトルストイ論文を読んでいた可能性は大きい。

研究史のうえでは、「君死にたまふことなかれ」とトルストイの日露戦争論との直接的関係について言及されることは少なかったが、1998 年 7 月 26 日発行の「朝日新聞」（日曜版）の「100 人の 20 世紀」で与謝野晶子が

取りあげられ、「君死にたまふことなかれ」は敵国ロシアの文豪トルストイへの「返歌」であった、ということが指摘された。それをふまえて岩崎紀美子が「詩『君死にたまふこと勿れ』成立に関する試論」（「叙説」2000年12月）、「内なるトルストイ」（「叙説」2009年3月）で、「君死にたまふことなかれ」の詩の発想が「東京朝日新聞」のトルストイの日露戦争論の影響によるものであることを綿密に論証している。したがって岩崎論文がきわめて正当性の高いものであることを指摘するにとどめ、「かたみに人の血を流し、獣の道に死ねよとは、死ぬるを人のほまれとは、」とうたう晶子の思想が「戦争は正義と人道を亡ぼす最大の暴力である」というトルストイの平和思想によって導かれたものであることを強調しておきたい。

四、渡欧体験と世界平和思想

その晶子の「平和思想」への志向が自覚的に飛躍するのは、「欧州の旅行から帰って以来、私の注意と興味とは芸術の方面よりも実際生活に繋がった思想問題と具体的問題とに向かうことが多くなった。」（「鏡心燈語」「太陽」大正4年1月、2月）という渡欧体験による。この渡欧体験の意義については、すでに拙著『日本近代短歌史の構築—晶子・啄木・八一・茂吉・佐美雄』（2006年4月、八木書店）で論及しているので、この渡欧体験の最大の成果は、「自由に歩む者は聡明な律を各自に案出して歩んで行くものである」ことを発見したということだけを確認しておきたい。

ともかく晶子は、寛という「夫」「男」の論理や言動のくびきから解放されたように、女性の立場から思想的社会的な問題にたいする言論活動を積極的に展開するようになるが、異文化体験にもとづくインターナショナルな思考軸に重く立ちはだかるナショナリズムの壁にぶつかることになる。

もとより晶子が立ち向かうナショナリズムは偏狭な国家主義、日本主義、愛国主義ではなく、「日本を愛する心と世界を愛する心」を融合し、統率する相対的な視座がその根幹にあった。というものの「日本民族の一人」であり、と同時に「世界人類の一人」であるという自覚をもって、現実社会の全般を観察し判断することは容易ではない。その容易ならざる難

問にたいして、渡欧後の晶子は全力で立ち向かおうとした。

その渡欧後の晶子の平和思想の核心にかかわる三点について言及しておきたい。

(1) 宇宙を包容する愛

何がために生きているのかを知らずに盲目的な日送りをしていた私達は何よりも先ず自分の生きて行きたいと望む意欲が人生の基礎であり、その意欲を実現することが人生の目的であることを徹底して知るのが第一です。自己の絶対的尊厳の意味もそれで了解されます。何時でも自己が主で、家庭生活も社会生活も自己の幸福のために人間の作為するものであるということを知るのが同時に必要です。目の開いた人間の意欲は狭い利己主義の自己にのみ停滞していません。それらの機関を善用して家庭生活、社会生活、国家生活および世界的生活までを自己の内容に取り入れ、最初は五尺大であった自己を宇宙大の自己にまで延長するために必要な自由を欲し、自己以外の権威に圧制されることを欲しません。

(「婦人改造と高等教育」「大阪毎日新聞」大正 5 年 1 月 1 日)

(2) 博愛的人道的世界主義

私達は個人として、国民として、世界人としてという三つの面を持ちながら、それが一体であるという生活を意識的に実現したい。誰も無意識的には、また偶然的にはこの三面一体の生活の中に出つ入りつしているのですが、それを明らかに意識するとともに、できるだけ完全にその三面が一体である生活を築いて行きたいと思うのです。

(「三面一体の生活へ」「太陽」大正 7 年 1 月)

(3) シベリア出兵への異議

先ず私の戦争観を述べます。「兵は凶器なり」という支那の古諺にも、戦争を以て「正義人道を亡ぼす暴力なり」とするトルストイの抗議にも私は無条件に同意する者です。

(「何故の出兵か」「横浜貿易新報」大正 7 年 3 月 17 日)

（1）の「宇宙を包容する愛」とは、人生の基礎は「生きて行きたいという意欲」にあり、それは狭小な利己主義的なものではなく「世界的生活」を視野に入れたものであり、同時にそれは「愛」そのものであり、「宇宙を包容する愛」でなければならないという晶子の人間愛であった。（2）の「博愛的人道的世界主義」とは、第一次世界大戦という戦時体験によって獲得された晶子の〈世界平和〉への理念であった。個人としての「個人生活」、国民としての「国民生活」、世界人としての「世界生活」の三面が協同、連関、融和することによって、世界人類の幸福が実現する。〈平和思想〉の対極にある〈戦争〉〈国民皆兵主義〉〈侵略主義〉〈征服主義〉が「世界人類の幸福を破壊する動力」となることを警告する晶子であった。

しかしそうした晶子の警告と逆行するように、大正 4 年 1 月の中国にたいする 21 か条の要求いらい大陸の利権をめぐる日本政府の強硬な姿勢は、7 年 8 月のシベリア出兵の宣言へといたることになった。軍国主義、侵略主義のための〈戦争〉につながるシベリア出兵にたいして、（3）「シベリア出兵への異議」で「あくまでも反対しようと思っております。」という晶子の思想的基盤は、当時の吉野作造らによって牽引された大正デモクラシーの思潮の影響によってより強化された。

後年の晶子はその評論活動においてトルストイの言説をしばしば引用しているが、トルストイが晶子にとって「学問的基礎を与えてくれた第一の恩人」であったことは確実なことである。第一次世界大戦の前後に、シベリア出兵に激しく反対したように「戦争と平和」に関する論説が多くなったが、その晶子の非戦論的な意見にたいして非難の声も強かった。しかし晶子は男女対等の人道主義を根幹とした「平和思想」の提唱をもって自己の信念を貫こうとした。第 7 評論集『心頭雑草』（大正 8 年 1 月）に収められた「平和思想の未来」（「太陽」大正 7 年 4 月）のつぎの一節は、そのことを明証している。

> 現に世界初つて以来の狂暴な戦争が進展して居るからと云つて、戦争の必然を断定し、平和思想を空想視するのは、余りに眼界の狭い意見では無いでせうか

五、旧満州紀行とナショナリズム—結びにかえて

しかし昭和という時代は、晶子の〈世界平和思想〉の理念を後方に追いやるように〈戦争〉の時代に突入していった。昭和3年5月5日から6月17日にかけて南満州鉄道の招聘で晶子と夫の寛は、当時の満州（中国東北部）と蒙古（モンゴル）への旅にでかけた。このいわゆる満蒙旅行は、香内信子『与謝野晶子—昭和期を中心に—』（平成5年10月、ドメス出版）が昭和期の晶子の思想的転回の軌跡を綿密に検証しているように、昭和7年3月の満州国の建国以後の国策に同調する思想的立場へと転回する転機になったことは明白である。

紀行文集『満蒙遊記』（昭和5年5月）にしたがえば、満州の緊迫した空気を鋭敏に感じとった晶子は、日本人として中国人として世界人としての立場から「日本を世界から孤立させる結果になりはしないか」という危惧を抱いている。その晶子の危惧が昭和3年（1928）6月4日の張作霖爆殺事件として現実化された。

> 「ホテルは深夜にも汽車の出入りする汽笛や響きのために殆ど眠られなかった。翌朝私は早く起きて東京の子供に送る手紙を書いていると、へんな音が幽かに聞こえた。」
>
> 「私達は初めて今先のへんな爆音の正体を知ったと共に、厭な或る直覚が私達の心を曇らせたので思わず共に眉を顰めた。」

いわば私たちは歴史の証言者であるという使命感に燃え立つように、帰国後の晶子は「愛と人間性」（「横浜貿易新報」昭和4年3月3日）のなかで、昭和2年5月の第一次山東出兵、3年4月の第二次山東出兵を決定した田中義一内閣の対中国政策を批判している。

> 愛を小部分に偏在させてはならない。一地方、一帝国に仕切らず、人種と国境とを越えて、共存共栄の生活を眼中に置くべき時代が到来したのに気づかない国民は、外交的にも経済的にも孤立し、民族としての自己生存を危うくするであろう。田中内閣の対支外交は南方においても満蒙においても、この意味から現に最も露骨な実物教授を受けている。これは田中内閣のみの問題ではない。平生隣邦の人間の生存に対する国民の愛の不足が、特に田中氏等の帝国主義的妄動を透して彼

の国の人心に反映したのではないか。

この「愛と人間性」という文章は、第 14 評論集『街頭に送る』（昭和 6 年 2 月）に収録されるが、しかし「人が互いに愛するには、人間性の全部を包容しなければならない。」という純粋な人間愛の発露によって、「日本を世界から孤立させ」ないで「民族としての自己生存」をはかろうとした晶子のインターナショナルな視座は、この時点を契機に後退していかざるをえなくなる。昭和 6 年 9 月の満州事変、翌 7 年 3 月の満州国の建国宣言を境に、民族愛祖国愛に根ざした発言が多くなる。渡欧後にインターナショナリズムの思考に立ちはだかるナショナリズムの壁にぶつかったように、満州への旅はふたたびナショナルな視角を晶子にもたらす契機となったことは否定できない。

〈戦争〉の必然を断定し〈平和思想〉を空想視することは眼前の狭い考えである、あるいは〈戦争〉の惨禍が逆に〈平和思想〉の実現を促進するものであるという大正期の晶子の理念とはかけはなれた昭和期の晶子の変貌じたいに、冒頭にのべた国際的人類的民族的な課題の困難さがある。ただこれだけは明言できる。明治、大正、昭和という近代を生きた晶子は、インターナショナリズムとナショナリズムとの相剋や葛藤をとおして、みずからの「平和思想」をいわば螺旋状に発展させようとする意志だけは持続していたといえよう。別言すれば、21 世紀における世界の一体化がグローバル化という視点だけでは容易に解決できない複雑な課題であることを、晶子における「平和思想」から学ぶことも無意味なことではないであろう。

〔作者附記〕講演原稿（静宜大学日本語文学系　台湾日語教育学会　2010 年度「国際日本語教育研究」国際シンポジウム―台湾・日本・韓国における日本語教育の現状と発展）。

On the Pacifism of Yosano Akiko

Ōta, Noboru
Professor, Dept. of Japanese Language and Literature
National Taiwan University

Following the outbreaks of a series of terrorist attacks in the U.S., the War in Afghanistan, and the Iraq War, some overwhelmingly abstruse and perplexing concepts such as "war and peace," "ethnic conflict," and "counter-terrorism" have become issues raised by the globalized human society at the dawn of the 21st century.

To begin the discussion over these complex and controversial issues, this essay provides an analysis of Yosano Akiko's "Kimi shinitamou koto nakare (Thou Shalt Not Die)," the background of which is the Russo-Japanese War of 1904. Ever since initial publication in the September 1904 issue of *Myōjō*, the poem has been perceived as an anti-war or non-war poem, and as a criticism of the Imperial system.

In lieu of the perspectives mentioned above, this essay reexamines the poem, focusing on its theme "in pursuit of world peace," and discloses its relationships with female war poetry writers of her time and the connection with the great Russian writer, Leo Tolstoy.

Apart from the close reading of the poem itself, the second part of the essay discusses how her trip to Europe, especially France, along with her trip to Manchuria (located in the northeastern part of China), would impact her pacifism later on.

Keywords："Kimi shinitamou koto nakare (Thou Shalt Not Die)," Leo Tolstoy, Europe experience, pacifism, Manchuria travelogues